

---

令和3年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業

# 実施報告書

---

教職員のいじめの認知力や対応力等の向上、児童生徒の社会性の育成及び学校、家庭、地域におけるいじめ防止の意識の醸成を図ることを目的に指定校が取り組んだ実践をまとめたものです。

## ＜事業実施校＞

糸 魚 川 市 立 南 能 生 小 学 校

長 岡 市 立 日 越 小 学 校

柏 崎 市 立 槇 原 小 学 校

魚 沼 市 立 湯 之 谷 小 学 校

村 上 市 立 岩 船 小 学 校

阿 賀 野 市 立 堀 越 小 学 校

佐 渡 市 立 相 川 小 学 校

粟 島 浦 村 立 粟 島 浦 小 学 校

新潟県教育庁生徒指導課

# 令和3年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 糸魚川市立南能生小学校

## 1 取組の実際

大きな生き物(牛)を飼う体験を通して、相手の気持ちを思いやる心や仲間と協力する心情を高めることで、いじめの未然防止へとつなげたいと考え「牛の飼育」に取り組んだ。

| 月        | 主な取組                                                                                             |
|----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4 月      | ・牛を飼うための事前学習                                                                                     |
| 5 月      | ・牛との関わり方・牛を飼うにあたっての心得等について学習（くろべ牧場への縦割り班遠足）<br>・小屋・道具等の準備                                        |
| 6 月      | ・地域の牛の飼育名人から、牛の飼育について講話<br>・牛の入学式の準備 ・牛の入学式                                                      |
| 6 月～11 月 | ・縦割り班ごとに、牛のお世話 ・牛との関わり方について話し合い（えさの量、小屋の環境、ハエを退治する方法等）<br>・牛との関わりについて、他の学習と関連づけて表現（国語、図工、総合、音楽等） |
| 9 月      | ・いじめ見逃しゼロ県民会議（オンライン）に参加し、牛との関わりで学んだことを発表                                                         |
| 10 月     | ・獣医・丸山医師の講演会（PTA親子健康教室）<br>・地域芸能祭において牛の飼育活動での学びを発表<br>・牛の卒業式の準備 ・牛の卒業式                           |
| 11 月～1 月 | ・自分の成長を振り返り、まとめる活動                                                                               |
| 2 月      | ・授業参観で自分の成長を発表                                                                                   |

## 2 成果

### (1) 取組による効果（※児童生徒、教職員、家庭、地域等からの評価等）

#### ① 児童アンケートの結果（2学期）

| 評価項目                                   | 十分あてはまる | ほぼあてはまる | あまりあてはまらない | あてはまらない |
|----------------------------------------|---------|---------|------------|---------|
| 学校に来るのは楽しいですか。                         | 95%     | 5%      | 0%         | 0%      |
| 今のクラスは、いじめやからかいがあっても「やめようよ」と言えるクラスですか。 | 86%     | 14%     | 0%         | 0%      |
| 友達に進んであいさつしたり、思いやりのある言葉でかかわったりしていますか。  | 81%     | 19%     | 0%         | 0%      |

今年度はさらに、牛の世話をとおして命を大切にすることができた。また、言葉の通じない相手（牛）に対しても、やさしく言葉掛けをし、牛の気持ちになって世話をする姿が見られた。当校は、全校児童22名の小規模校である。幼稚園の頃から一緒のため、兄弟姉妹のように仲が良い。毎朝の縦割り班でのお世話では、上学年の児童は下学年の児童を気遣い、下学年の児童は上学年の児童を慕って活動していた。

児童、保護者アンケートともに肯定率の高い評価であった。1つ目の「学校に来るのが楽しい」は、肯定率が100%であった。「十分あてはまる」も95%である。2つ目は、いじめの未然防止に関わる評価項目である。これも肯定率が100%で、「十分あてはまる」も86%であ

った。3つ目は、人とのかかわり（あいさつと思いやり）に関わる評価項目である。これも肯定率が100%で「十分あてはまる」も81%であった。

## ② 保護者アンケートの結果（2学期）

| 評 価 項 目                     | 十分あてはまる | ほぼあてはまる | あまりあてはまらない | あてはまらない |
|-----------------------------|---------|---------|------------|---------|
| お子様は、学校へ行くのを楽しみにしている。       | 38%     | 62%     | 0%         | 0%      |
| お子様は、よいと思ったことを進んで行動に移している。  | 38%     | 62%     | 0%         | 0%      |
| お子様は、あいさつや思いやりのある言葉遣いをしている。 | 19%     | 71%     | 10%        | 0%      |

## (2) 特に効果が見られた取組

### ○牛の飼育

- ・「小屋の排水」「暑くなるとともに発生したハエ」など問題に対してランチミーティングを行い、課題解決を図った。
- ・「マロンタイム」など高学年が自主的に活動を企画し、牛と積極的に関わった。
- ・縦割り班で協力して、毎朝お世話をした。
- ・文化祭で牛との出会いや関わりについて発表した。
- ・牛の入学式・卒業式を計画し実施した。



<牛の入学式>

### ○生活集会

- ・いじめ見逃しゼロについて自分たちにできることを縦割り班で話し合った（6月）。
- ・縦割り班のみんなのがんばっているところを書いて、相手のカードに貼った（9月）。



<ラストマロンタイム>

### ○いじめ見逃しゼロ県民会議（オンライン）への参加

- ・牛との関わりといじめの未然防止についてクラスで話し合い、意見をまとめた。
- ・上越地域の代表として、いじめ見逃しゼロ県民会議（オンライン）に参加した。



<縦割り班で話し合い・発表>

## 3 課題

誰もが初めての牛の飼育だった。思うように行かないところがあったかもしれない。けれど、児童は牛の気持ちになって考え、精一杯関わり、楽しんでいた。牛の卒業式から4ヶ月が経つが、今でも「マロン(牛の名前)元気かな?」「もうすぐ1歳になるね。」と意識は継続している。児童は話し合いで「活動を通して、思いやりの気持ちを高め、自信を深め、自主性を培うことができた。」と振り返った。また、「もしもマロンとの関わりがなかったら、転校生と仲良くすることができなかったかもしれない。」と自らの成長の糧となったことをまとめた児童もいた。

学習面から振り返ると、牛との関わりで気付いたことや学んだことを教科等と関連させる場がまだあったとも考えられる。当校では、この取組を通じて、いじめの未然防止への実践力をまた一つ高めることができたと考えている。

## 1 取組の実際

児童アンケートの結果から、当校の児童は、幼少期から家庭におけるオンラインゲームやSNS等の利用率が高い。そのため、ゲーム時間が長く、生活リズムが不規則な児童がおり、遅刻や集中力の低下など学校生活に支障をきたしている児童がいる。また、実生活での他者との人間関係づくりが未熟なため、ネットワーク上での不適切な発言やグループ化等のトラブルが見られる。

そこで、ネットワーク上と実生活の両面で適切な人間関係を築く力を高めることを目指して、次の3つの取組を推進した。

### (1) 外部講師による情報モラル教育に関する児童向け講話の実施

一般社団法人インターネット協会の久保真紀さんを講師として招聘し、児童向けの情報モラル講話をしてもらった。「1日に何時間、メディア機器と接しているか」を基に、それを1週間、1か月、1年と計算することにより、自身のメディア利用時間の長さを痛感し、長期休業期間の利用時間の低減につながった。併せて、ゲーム依存症やネットトラブルの怖さについて学ぶことを通し、「大人に相談しながら利用する」等の安全意識を高めることができた。



<情報モラルについての講話>

### (2) 異年齢集団での縦割り班活動の充実

児童会主催の「あおぞら冬まつり」に向けて、全校を楽しませる出店の計画や準備を縦割り班ごとに進めた。6年生を中心に話し合いを進め、学年の発達段階に応じた役割分担をすることにより、学級生活だけでは得られない所属感や自己有用感を高めることができた。

また、「登校しながらクリーン活動」などの活動のあとに、友達のよいところや言われたら嬉しくなる言葉などをカードに書いて伝え合う取組を行った。縦割り班のメンバー同士で互いにカードを書いて交換することにより、自己有用感を高めることができた。

### (3) 地域と共に歩む教育活動の充実

民生児童委員や後援会、町内会等、地域の様々な人たちと共に教育活動を行っている。外部講師として、稲作や防災、書写の指導、地域の歴史講話や本の読み聞かせなどをしてもらった。また、「お祝い花火の打ち上げ」に、たくさんの地域の人からの協力を得られた。

コロナ禍の制限の中でも、地域の高齢者に心温まる手紙を全校児童が書いたり、1年生が園児にメッセージや飾りを作って届けたり、工夫したりすることにより、直接会うことはできなくても心の交流を深めることができた。

## 2 成果

### (1) 取組による効果

#### ① 児童、保護者の受け止め（学校評価アンケートから）

|     | 質問項目                                                    | 7月  | 12月 |
|-----|---------------------------------------------------------|-----|-----|
| 児童  | 学校が楽しい。                                                 | 87% | 92% |
|     | 周りの人は「頑張れ」「すごいね」「ありがとう」などの温かい言葉を掛けてくれている。（メッセージカード等も含む） | 81% | 82% |
| 保護者 | お子さんは、友達のよいところを見付けたり、相手の気持ちを考えて行動したりしていますか。             | 88% | 89% |

#### ② 職員の受け止め（学校評価アンケートから）

- ・どんな言い方をすれば、仲よく活動できるかというスキルを学ぶことにより、思いやりのある温かい言動が増えた。
- ・困っている人を見掛けると、進んで声を掛けたり助けたりする児童が増えた。
- ・グループ学習で、互いに協力し合って課題解決に取り組める児童が増えた。
- ・友達のよさを伝え合ったり、自分の得意なところを意識したりすることで自分もクラスの大事な一員であるという思いが強くなっている。

### (2) 特に効果が見られた取組例

#### ① 「登校しながらクリーン活動」

花火打ち上げのお礼として、「応援してくれた地域の人に感謝の気持ちを伝えたい」と、「登校しながらクリーン活動」を計画した。通学路に落ちているごみを民生児童委員の人たちと一緒に集めながら登校することで地域の美化を行い、感謝の気持ちを形にすることができた。



<登校しながらクリーン活動>

#### ② 「創立120周年記念祝い花火の打ち上げ」

創立120周年記念に併せて、6年生から「自分たちにもできる方法で120周年をお祝いしたい。みんなの力を合わせて、長岡市が誇る花火を打ち上げたい」という提案がなされた。資源回収を行い、募金を呼び掛けることで資金をつくり、そのお金で花火を打ち上げることにした。地域からも資源回収にたくさんの協力をしてもらったことで、見事な花火を日越小学校の夜空に打ち上げることができた。



<資源回収>

## 3 課題

縦割り班活動や地域との交流は、コミュニケーション能力を高めるうえでとても効果がある。一方で、直接触れあわなければできない活動は、準備を進めても、新型コロナウイルス等の感染症の拡大状況によっては、直前に延期や中止になってしまうことがあった。実施時期や活動内容を吟味し、できる限り児童が計画したことを無駄にせず、高まった思いを実現できるように、見通しをもった計画や準備を進めていきたい。

# 令和3年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 柏崎市立榎原小学校

## 1 取組の実際

当校では、積極的ないじめ認知を実践し、なおかつ未然防止に取り組んでいる。一昨年、昨年と、いじめの認知件数も減り、確実によい成果が現れている。

しかし、コロナ禍の今日、精神的に不安定になる児童、落ち着きがなくなっている児童が増えている。そこで、以下の5つの視点で取り組むことにした。

＜いじめの未然防止に向けた取組の視点＞

- ① 児童一人一人が役割を果たし、主体性を育てるためのふれあい班活動  
→縦割り班で活動するふれあい遠足、清掃、まきの子フェスティバル、6年生を送る会など
- ② 自己肯定感、達成感を高めるための地域とかかわる活動  
→地域探検（2年）、稲作体験活動（5年）、特産物の栽培活動・西中通めぐり（6年）など
- ③ 中学校区との連携  
→いじめ見逃しゼロスクール集会をリーダーによる「絆づくり会議」に変更して実施
- ④ 育てたい子どもの姿や困り感を共有し、よりよく支援するための保護者との連携  
→講師を招いての「メディアコントロール学習会」（学校保健委員会）など
- ⑤ 教職員の人権感覚を高めるための研修会への積極的参加、講演会の実施  
→同和教育の校内研修、全校朝会での人権講話、いじめをしない、許さない授業の実施

また、全職員がさらなるきめ細やかな観察と一人一人の児童に寄り添った支援をしていけるよう、本研究パイロット事業を活用した。

## 2 成果

### (1) 取組による効果※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容)

＜認知件数＞

| 令和元年度 | 令和2年度 | 令和3年度（2月まで） |
|-------|-------|-------------|
| 71件   | 33件   | 16件         |

- ・児童の気になる様子を回覧板（校務支援システム）に記録し、担任だけでなく全職員で共有できるようにしているため、早期に気づき、深刻な状況になる前に対応できている。

＜児童の受け止め（児童アンケートから）＞

| 質問項目                      | 7月  | 12月 |
|---------------------------|-----|-----|
| 相手のよさを認め、相手のことを考えて行動している。 | 93% | 95% |

- ・思いやる行動とは何か、仲良くするとはどういうことなのかを具体的に示し、その行動のやり方を学ぶ授業やいじめにかかわる道徳の授業を、全学級で積極的に行った。また、学校生活の中でトラブルや葛藤の場面があった際には、授業での学びと結び付けて考えさせたことで、いじめをしない、許さない実践力を高めることができた。
- ・当校のふれあい班活動は、全学年が学年ごとに役割を担い、メンバーのために仕事をするように計画されている。そのため、班員を助けたり、協力したりすることの意欲が高まり、振り返りの作文などでは、みんなの役に立てたことに対する満足感がたくさん表れていた。自己有用感の高まりがいじめの未然防止に生かされている。
- ・中学校区の「絆づくり会議」に参加した児童が、学校の代表として発表したり交流したりする経験を積んだことで、全校の前でリーダーシップを発揮できるようになった。そして、「いじめは絶対にいけない」と自信をもって全校へメッセージを投げ掛けた。
- ・トラブルがあっても自分の非を認めて素直に謝ったり、自分の気持ちを相手に正直に伝えたりして、関係性の修復が早い。また、その後は仲良くかかわろうとする姿が見られる。

＜保護者の受け止め（保護者アンケートから）＞

| 質問項目                      | 7月  | 12月 |
|---------------------------|-----|-----|
| 相手のよさを認め、相手のことを考えて行動している。 | 80% | 80% |
| 毎日の学校生活を楽しく過ごしている         | 94% | 95% |

- ・思いやる行動とは何か、仲良くするとはどういうことなのかを具体的に示し、その行動のやり方を学ぶ授業やいじめにかかわる道徳の授業を、全学級で積極的に行った。また、学校での学びの様子（道徳の授業やSSTなど）を便り等で継続して発信しているため、おおむね肯定的評価が得られている。
- ・人間関係のトラブルは日々発生するものの、どの学年も担任が生活指導部と連携し、速やかに指導しているため、深刻な問題に至る前に早期解消につながっている。また、保護者へも丁寧に対応することができ、信頼関係が保たれている。
- ・学校評価アンケートでは、「稲作体験活動や栽培活動の経験は、子どもたちにとって大変意義のあるものなので、感染症による行動制限があっても是非継続してほしい」という地域や保護者の方々の声を多数いただいた。

## (2) 特に効果が見られた取組例

遠足、まきの子フェスティバルなどの全校縦割り班（ふれあい班）活動において、自己有用感を高めるために、全ての児童が活躍できる場面を設定した。

例・遠足：1年生は「いただきます」「ごちそうさま」の号令、4年生はごみ拾いを指示

- ・班ごとに出店を開くフェスティバル：1、4年生は出店のCM制作 3年生はポスター制作

### 【成果】

年度初めは、異学年とかかわる際には、どの児童も緊張感している様子が見られた。だが、高学年に優しく手伝ってもらったり、低学年に頼りにされたりする中で、徐々に自信や喜びが表出されるようになった。学年が担当する役割を果たせたことへの満足感、達成感が振り返りシートにたくさん書かれていた。

いじめは、自分に自信がもてない児童が、自分より下・弱い立場だと認識した相手を攻撃することで優越感を得る行為であるともいえる。ふれあい班活動は、「自分は人の役に立てている」という気持ちや自信を高めることができる。また、高学年は下の学年に対して、手助けをしたり、優しい声を掛けたりして、思いやりの気持ちを高めることができた。

### 【課題】

当校において、異学年交流は教育活動の核ともいえるものであるが、新型コロナウイルス感染症拡大によって、その多くは中止・縮小せざるを得ない状況であった。成功や失敗も含め、交流の経験数を重ねることによって、児童の意識は高まっていくものだが、それが不十分だったのは非常に残念であった。様々な制限があるこの状況下でも、成果を高めたいけるよう取組を工夫し、安全、安心に配慮した「新しい活動の形」を模索していく必要がある。

## 3 課題

感染症拡大防止対策のため、異学年交流活動の積極的な展開や研修会への参加ができなかった。外部講師を招いての講演会は何とか実施できたが、このような感染拡大の状況下でも、感染状況を見て、柔軟に実践を重ねていかねばならない。

また、児童の生活の場である家庭は未だに様々な制限があり、ストレスなどから不安定になったり、トラブルが発生したりすることが懸念される。今後も全職員が一丸となり、「いじめ見逃しゼロ」を念頭において教育活動に取り組んでいく。

## 1 取組の実際

登校では一人一人（個）を伸ばすため、「温かい学級づくり自校プラン」に基づき、居心地の良い学級づくりに向けて全校体制で取り組んでいる。その結果、不登校傾向を示す児童はどの学年にも見られるものの、深刻ないじめや児童間のトラブルは少ない。しかし、生活アンケートや個人面談を通して、いじめに発展する可能性がある行為の発生を確認しており、中でもネットトラブルへの対応とコミュニケーション力の向上が課題となっている。そこでいじめの未然防止に向け、児童同士の好ましい人間関係づくりや支援の在り方、いじめに対する職員の対応力向上を図るため次の取組を行ってきた。

### (1) 温かい学級づくり自校プランに基づく学級経営（WEBQU を活用した学級づくりの推進）

- 年間計画に基づく全校体制による実践
- WEBQU の結果分析を基にした学級づくり事例検討会（講師：魚沼市教育委員会指導主事）
- ソーシャルスキルトレーニング、学級活動の充実
- 学級会や委員会活動における児童の主体的な自治活動の推進
- 座席表の利用による個に応じた指導（インクルーシブ教育の推進）

### (2) メディアと人権に関する講演会

- 10月4日（月）「情報モラルの向上とメディアとの賢い付き合い方」
- 講師 南魚沼市立上関小学校 校長 梅澤 健一 様
- 対象 第3学年～第6学年児童

### (3) 人間関係づくりに関する講演会

- 1月18日（火）「いじめを生まないためのコミュニケーションづくり」
- 講師 ナマラエンターテイメント 森下 英矢 様
- 対象 第6学年児童

## 2 成果

### (1) 取組による効果

- ① いじめを生みにくく、いじめが発生しても深刻化させない学級づくりに向け、児童の望ましい変容が見られた。※WEBQU の結果から（1回目実施→5月 2回目実施→12月）
  - ・親和型の学級の割合 60%→90%
  - ・インクルーシブライン内に入る児童の割合 87.8% → 93.4%
  - ・いじめ不登校の可能性が高い児童の割合 2.1% → 0%
  - ・ソーシャルスキルが高い児童の割合 50.6% → 62.5%
- ② 児童を取り巻くネット環境の現状と課題が明確になり、保護者との連携によって問題解決を図っていかこうとする職員の取組意識が高まり、学年懇談会での話題づくりや学年だよりによる啓発が進められた。

### (2) 特に効果が見られた取組例

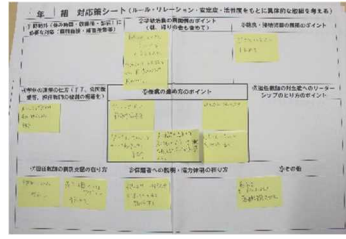
#### ① よりよい人間関係の形成を目指す集団づくり（温かい学級づくり自校プランの実施）

生活目標とソーシャルスキルトレーニングを関連付け、年間を通してよりよい人間関係づくりに向けて取り組んできた。今年度は感染症拡大防止への配慮から、集会活動は行わず指導事項に関するビデオを職員が制作し、学級ごとに指導を行った。全校が一斉の構えで指導し定着を図っている。日々の学校生活の中で見られる児童の行動変容について、職員終会等において情報が共有され、成長を確認することができた。（写真は10・11月「温かいメッセージを伝え合おう」の取組の様子）

職員の指導力向上に向け、魚沼市教育委員会指導主事を招聘し、年間3回取り組んでいる WEBQU の結果分析を基にした「学級づくり事例検討会」を行った。学級内における居場所が見つ



けられず、不適切な行動をとる児童への支援をするため、インクルーシブライン内に入らない児童について、様々な角度から支援の具体的な方法を検討した。支援内容を共有することで、担任だけでなく児童に接する全ての職員が適切なかわり方をするとともに当該児童を取り巻く環境を整えることにより児童の自己肯定感が高まり、心の安定を図ることができた。その結果、いじめ等の問題行動が無くなり落ち着いた学校生活が戻った。



## ② 講師招聘による講演会の実施

### ○ メディアと人権に関する啓発【メディア講演会より】

予め児童へのアンケートを実施し、実態に基づいた内容構成でオンラインゲームをする際の「時間」と「人間関係」についてご講演いただいた。アンケートの結果からゲームへの依存度の高さが浮き彫りとなる中で、児童が日頃接しているゲームを取り上げ、児童が陥りやすい望ましくない行動について注意を促した。真剣に聞き入る姿から、ゲーム依存になると医療の力が必要になることなど、自分たちが深刻な問題に直面していることを感じ取っている様子が窺えた。

オンラインゲームでの人間関係の悪化や課金や詐欺などの事案も近年増えているという話から、危険なことに巻き込まれるかもしれない環境が身近にあるということを児童は強く感じた。児童の振り返りには、「気付かぬうちに悪口を言っていることがあった。人間関係は簡単に壊れてしまうから気を付けたい。」や「自分のことを見直すと勉強の量に変化が出ていることが分かった。メディアの時間をしっかりコントロールして生活を見直したい。」といった感想が書かれていた。メディアを完全に遠ざけることはできない生活環境の中で、「賢い付き合い方」を身に付けていかなければならないという講演は説得力があり、自己の行動を振り返らせるとともに児童の心に強く響いた。



### ○ ルールとリレーションのある学級づくり

#### 【いじめを生まないコミュニケーション講演会より】

いじめに関する講話は堅苦しくなりがちであるが、笑いの要素やゲームを取り入れながら児童に自分自身の問題として考えさせたり、実感を伴って感じ取らせたりする講演会であった。

〔要旨〕いじめの未然防止には、他者とのコミュニケーションが重要である。「意見の違う相手のことをどう分かり合うか」ということや、意見が全く違う人同士がお互いを認め合って過ごしていくには、まず「自分の意見は変えない」ということ、そして、「相手は相手と考え、お互いの立場を褒めるようにする」ということが大切である。もう一つは、「周りの人が参加して、いじめを止める」ということである。いじめに関係している当事者同士は必死で周りが見えず、冷静に物事を考えられなくなっている状態になっている。そのような状態で物事を解決しようとしても、お互いを責め続け、より事態が悪化していくことになる。そこで大事なのが、「周りの人」である。周りの人が気づき、行動し、より多くの人がある問題に参加することで解決できることが増えていく。



## 3 課題

いじめの問題は学校だけで解決できるものではない。学校・家庭・地域が連携を図りながら共通の取組を実践していくことでより効果的に指導を行うことができる。次年度から魚沼市で導入されるコミュニティ・スクールの取組の中でも「いじめ見逃しゼロ」の視点から熟議を重ねていくことが必要である。

# 令和3年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 村上市立岩船小学校

## 1 取組の実際

当校は全校児童 125 名で転出入も少なく、1 保・1 小・1 中のため、中学校卒業まで児童はほぼ同じ人間関係で学校生活を送ることになる。児童同士はだれとでも気さくに話せる関係性ができていて、学校全体が明るい雰囲気である。その一方で、ストレートな物言いが知らず知らずのうちに相手を傷つけてしまっている事例があった。

そこで、今年度は、どの児童も安心して学校生活を送ることを第一に考えた。児童には、「温かい言葉と笑顔があふれる活動」と「好ましい人間関係づくりの活動」を、教職員には、「指導力・対応力の向上」や「居心地のよい学級づくり」に係わる研修を行った。

| 月  | 主な取組                                                                                                                       |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4  | ・全校ソーシャルスキル集会①「気持ちのよい挨拶を交わそう」                                                                                              |
| 5  | ・いじめ見逃しゼロアンケートと面談（5月～2月の8月を除く年9回）                                                                                          |
| 6  | ・ソーシャルスキル集会②「友達の話上手に聴こう」 ・学年ほめ言葉月間<br>・いじめの未然防止に係わる職員研修（①上教大・高橋知己教授、②スクールロイヤー）<br>・第1回ハイパーQ-U検査の実施 ・文章完成法アンケートSCT①と分析結果の活用 |
| 7  | ・ソーシャルスキル集会③「仲間に入ろう 友達を誘おう」<br>・保護者対象講演会「いじめの未然防止に係わる家庭の役割」                                                                |
| 8  | ・ハイパーQ-U分析と活用に係わる事例研修①（新潟清心女子高・吉澤克彦特別顧問）                                                                                   |
| 9  | ・ソーシャルスキル集会④「上手な頼み方を身に付けよう」                                                                                                |
| 10 | ・ソーシャルスキル集会⑤「温かいメッセージを伝え合おう（褒める、感謝する）」<br>・岩船中学校区いじめ見逃しゼロスクール集会（中学校生徒会主催）<br>・校内いじめ見逃しゼロスクール集会（児童会主催）                      |
| 11 | ・ソーシャルスキル集会⑥「温かいメッセージを伝え合おう（気遣う、励ます）」<br>・いじめ見逃しゼロキャラバン出前授業「SOSの出し方」（教育研修コーチング協会）<br>・第2回ハイパーQ-U検査の実施 ・学年と縦割り班のほめ言葉月間      |
| 12 | ・ソーシャルスキル集会⑦「友達の気持ちを考えて、温かいメッセージを伝え合おう」                                                                                    |
| 1  | ・ハイパーQ-U分析と活用に係わる事例研修②（新潟清心女子高・吉澤克彦特別顧問）<br>・ソーシャルスキル集会⑧「上手な断り方を身に付けよう」                                                    |
| 2  | ・ソーシャルスキル集会⑨「不平・不満を上手に伝えよう」<br>・文章完成法アンケートSCT②と分析結果の活用                                                                     |

## 2 成果

### (1) 取組による効果

#### ① 児童に見られた成果として

ソーシャルスキル集会の継続的な実施により、友達との好ましいかかわり方を意識する姿が、ほめ言葉を伝え合う活動をとおして、友達のよさを再認識して伝える姿が多く見られるようになった。学校生活アンケート「自分にはよいところがある（自己肯定感）」の肯定的評価の割合も、昨年度末の50%が、7月には75%に、12月には80%に増えた。また、吉澤先生からの指導を受け、どの学年も一人一人の児童に目を向けながら居心地のよい学級づくりを心掛けた。第2回Q-U検査では、満足群に属する児童の割合が第1回目の71%から76%に増えた。

いじめの認知件数は、昨年度の8件から今年度2月末までで4件に減った。毎月のアンケートをもとに丁寧な聞き取りをすることで、小さなトラブルを見逃さない体制や、児童同士の好ましい人間関係づくりが少しずつできており、いじめの未然防止につながっていると考えられる。

#### ② 職員に見られた成果として

教職員アンケート「いじめ防止の取組」については、「よい」85%、「見直しが図られた」7%で

あった。児童の姿や学級の落ち着いた雰囲気を、取組の成果として評価していると考える。

## (2) 特に効果が見られた取組例

### ① 全校一斉でよりよい人間関係づくりを育む「ソーシャルスキルトレーニング」

好ましいかかわり方についてのテーマを選び、年9回、全校一斉でソーシャルスキルトレーニングに取り組んだ。まず、全校ソーシャルスキル集会で、教職員（一部高学年児童）がロールプレイをし、相手を傷つけないかかわり方を伝えた。次に、学級活動で、全校集会で学んだことをもとに、児童が実際に演じながら友達との好ましいかかわり方を考える時間をとった。

最後に「トライ週間」を設け、友達とのよりよい関係をつくるため、学んだ内容を意識的に使うための期間を設定し実践したことをカードに記録させたことで、子どもの意識が高まった。

### ② 好ましい人間関係づくりを自己肯定感を高めることにつなげる「ほめ言葉」活動

児童の自己肯定感を高めることがいじめの未然防止につながると考え、友達のがんばりやよさをみんなで認め合う時間を設定した。6月と11月の2回、「学年ほめことば月間」を実施した。11月は、言葉でほめ言葉を相手の児童に伝えることを重点に実践した。また、11月に、縦割り班での清掃反省会時に、1日に一人ずつ、その児童のがんばりをメンバー全員が賞賛する「ほめほめタイム」を取り入れた。学級や縦割り班のメンバー全員から自分のよさを褒められることで、少しずつ自分に自信をもつことができるようになったことがアンケート結果からもうかがえる。

### ③ いじめの未然防止に力を発揮できる教職員集団となるための職員研修

特別支援学級を含む担任、授業担当者の半数が経験4年目までの教職員が半数を占めるため外部講師を招聘した、以下のような研修会を実施した。

#### A ハイパーQ-U検査の結果分析と活用についての事例研修会

清心女子高等学校 吉澤克彦特別顧問を講師に、7月と1月の2回、ハイパーQ-U結果分析をもとに、学年部ごとに、「よりよい人間関係形成を目指す集団づくり」に向けた事例研修会を行った。吉澤先生の指導・助言により、各担任は結果についての理解が深まり、今後重点的に取り組むべき点を明確にして次学期の指導に生かすことができた。

#### B いじめの認知力や初期対応力の向上に向けた職員研修

上越教育大学 いじめ・生徒指導研究センター長 高橋知己教授を講師に、6月に「いじめの未然防止のための見守りや早期発見のためのポイント」について具体的にお話いただいた後、当校の児童に行う「SCT（文章完成法）アンケート」の作成演習を行った。8月には、アンケート結果の分析をもとに、いじめの未然防止の視点をご指導いただいた。2回の研修で、教職員のいじめ未然防止の意識が高まった。

#### C スクールロイヤー活用事業による職員研修会

6月に、弁護士の佐藤克哉様を講師に、いじめ防止対策推進法の内容について、弁護士の立場から実際の事例などをもとに詳しくお話いただいた。事件が起きると必ず学校の対応が問われるので、いじめについての認識をしっかりとち、職員全員で情報共有する必要性を感じた。

## 3 課題

検証結果から、本事業により目指す児童の姿に少しずつ近づいてきたと考える。高橋知己教授の保護者向け講演会は、参加者数は少なかったものの、「いじめは誰にでも起こりうる」と再認識したと参加した保護者からは好評であった。今後も継続して、保護者や地域への意識啓発の機会をもつ努力を続けていきたい。また、ソーシャルスキル集会やほめ言葉月間については、子どもたちがお互いの個性を認め合いながらよりよい関係をつくるうえでも効果が見られた。ただ、活動中やその直後の肯定的な気持ちが長く継続するのではなく、しばらくすると薄れていくことが分かったので、マンネリ化しないような工夫をしながら取り組んでいく必要がある。

## 1 取組の実際

当校は各学年単学級であるうえに、多くの児童は同じ保育園出身であり、入学前から小学校卒業まで、ほぼ同一メンバーで過ごしている。そのため、児童同士は互いの性格や心情をよく理解し、良好な関係を築くことができている反面、人間関係が固定化する傾向にあり、小さなトラブルからいじめにつながるものが危惧される。

また、学校生活アンケート調査から、低学年や就学前からインターネットを利用してゲームや動画を楽しんでいる児童が多く、家庭にもネット環境が広がっている様子が見える。そのような状況の中で、過去にもネットトラブルの事案があったことから、保護者と連携してインターネット利用についての対策を講じる必要がある。

さらに、いじめ防止に関する職員研修を行い、いじめそのものへの理解を深めたり、組織的な対応のノウハウについての共通理解を進めたりしているが、まだ十分ではない。特に未然防止の観点から、いじめを生まないための学級経営の在り方について研修し、実践することを推進する。

このような実態の中で、次のことに取り組み、いじめの未然防止を図った。

## (1) いじめ見逃しゼロ集会

- ・互いの良さやがんばりを認め合いながら協働して活動する。
- ・いじめをしない・させない・許さない気持ちを育てる。

## (2) インターネット教室

- ・PTA 2 学年行事「親子インターネット教室」 講師：大久保真紀 様
- ・PTA 3 学年行事「親子インターネット教室」 講師：大久保真紀 様
- ・4、5 学年児童対象「インターネット教室」 講師：大久保真紀 様
- ・6 学年児童対象「インターネット教室」 講師：大久保真紀 様

## (3) 職員研修

- ・講演「いじめの芽をつむ温かくて強い学級をつくる」 講師：橋本 定男 様
- ・Q U アンケートの調査分析による児童理解と対策、及びその後の検証

## 2 成果

## (1) 取組による効果

## ① いじめ認知件数

|               | 令和元年度 | 令和2年度            | 令和3年度(12月末現在)     |
|---------------|-------|------------------|-------------------|
| いじめ認知件数       | 7 件   | 24 件             | 21 件              |
| いじめ解消率（3 か月後） | 未確認   | 100%             | 100%              |
| 教職員のいじめ発見率    | 未確認   | 8 % ( 2 / 24 件 ) | 33 % ( 7 / 21 件 ) |

- ・いじめの認知件数は増加傾向にあるが、それだけ教職員や児童が「いじめを見逃さない」という意識が高まっている。教職員のいじめ発見率の上昇もその現れである。
- ・認知したいじめ事案を適切に指導した結果、すべてのいじめ事案は3 か月経過後に解消している。

## ② 児童アンケート【肯定的評価の割合】

(単位：% 増減：ポイント)

|     | 学校が楽しい |       |      | 自分のよさを見付けた |       |      | 友達のよさを見付けた |       |      |
|-----|--------|-------|------|------------|-------|------|------------|-------|------|
|     | 1 学期末  | 2 学期末 | 増減   | 1 学期末      | 2 学期末 | 増減   | 1 学期末      | 2 学期末 | 増減   |
| 全 校 | 91.7   | 93.4  | +1.7 | 86.8       | 90.2  | +3.4 | 91.7       | 95.9  | +4.2 |

- ・ほとんどの児童が「学校が楽しい」と感じている。友達関係が良好であることが、その要因の一つとして挙げられる。
- ・友達の良さを見付けて伝えることにより、自分のよさに気付くことができ、自己肯定感を高めることができた。

「いじめをしない！させない！見逃さない！」

### ③ いじめ見逃しゼロ集会

- ・児童会が主体となり、縦割り班で友達のよさを伝え合う活動を計画し、いじめ見逃しゼロ集会を行った。最後に、全校児童が「誓いの宣言」を唱和し、自分たちでいじめを防ごうとする意識を高めることができた。



### ④ Q U の調査分析

(単位：％ 増減：ポイント)

|     | 学校生活満足群 |      |      | 非承認群 |     |      | 侵害行為認知群 |     |      | 学級生活不満足群 |     |    |
|-----|---------|------|------|------|-----|------|---------|-----|------|----------|-----|----|
|     | 6月      | 11月  | 増減   | 6月   | 11月 | 増減   | 6月      | 11月 | 増減   | 6月       | 11月 | 増減 |
| 全 校 | 87.0    | 89.7 | +2.7 | 9.3  | 8.5 | -0.8 | 1.8     | 0.0 | -1.8 | 1.8      | 1.8 | ±0 |

- ・全校では、学校生活満足群の割合が増加し、その他の群が減少もしくは同等の変容が見られた。職員研修による意識改革や対応策を検討したことにより、児童同士が互いのよさやがんばりを認め合い、支え合う学級・学校風土づくりが進んでいる。
- ・さらに、学年単位の詳細な分析をもとに、効果的な指導を継続していく。

### (2) 特に効果が見られた取組例

#### ① 取組 インターネット教室（親子対象2回、児童対象2回）

#### ② 講師 インターネット利用アドバイザー 大久保真紀 様

#### ③ 児童の感想

- ・インターネットは便利だけど、やってはいけないことはやらない。オンラインでゲームの約束をしたのに参加しなくても、「理由があって忙しいのかな」と相手の気持ちを分かってあげるようにします。
- ・インターネットで困ったことがあったら、おうちの人に相談する。知らない人に困ったことを話すと、もっとこまるかもしれない。

#### ④ 保護者の感想

- ・私がインターネットについて話をしてもあまり聞こうとしませんが、専門の先生からお話をしていただいたことにより、話がすうっと入ってきたようです。私自身よくインターネットを利用するため、とても勉強になりました。メリット・デメリットを理解した上で、正しく使っていこうと思います。親子で一緒に聞くことができてよかったです。
- ・普段から家庭で約束をつくって実践していますが、この機会に再確認することができ、改めてルールづくりの大切さを感じました。また、子ども自身も気付くことができたようです。最後の「大人は大丈夫ですか？」には、ドッキリしました。子どもだけではなく、大人も上手に利用しないといけないと反省しました。

#### ⑤ 効果

- ・児童自らが、これまでのインターネットの使い方を振り返り、これからの使い方を考えることができた。インターネットは便利であるが危険な面もあることを知り、相手の立場を思いやり、いじめにつながらないように正しく使うことの大切さを学んだ。
- ・保護者が児童と一緒にインターネット教室に参加することにより、保護者の意識を高めることができた。また、児童と講演内容を共有することで、保護者と児童が話し合い、家庭の教育力を高めることにも有効であった。



親子インターネット教室

## 3 課 題

児童は、いじめはよくないことを理解している。しかし、現実にはいじめ事案は発生している。その中で大切なことは、周囲の大人がいじめ防止に対する意識を高めることである。どれだけ未然防止できるか、早期発見できるかである。今年度は、職員研修や親子インターネット教室で外部講師を招聘し、いじめ未然防止のための意識改革を推進した結果、成果は十分にあり目的は達成されたと考える。

今後、この成果を引き継ぎ、いじめ未然防止の意識をもち続けるためには、さらに今年度同様の取組を継続していくことが必要である。

# 令和3年度 いじめの未然防止実践研究パイロット事業 実施報告書

学校名 佐渡市立相川小学校

## 1 取組の実際

相手によって態度を変えたり暴言暴力が見られたりする実態を踏まえ、自己肯定感を高め、互いを認め合い、安心して生活する姿を目指し、以下の取組を行う。

| 月  | 主な取組                                                            |
|----|-----------------------------------------------------------------|
| 年間 | ○ルールとリレーションの確立を目指す学級の取組と振り返り<br>○職員終会での情報交換会（毎週水曜日）             |
| 4  | 1学期の学級経営計画作成・実施                                                 |
| 6  | いじめ見逃しゼロ強調月間の取組<br>・クラスなかよし宣言の作成<br>・「よいこと金山」（児童会）<br>・Q-U（全学年） |
| 7  | Q-Uをもとにした学級経営に関する教職員対象研修会「児童を適切に理解する」（講師：県立教育センター指導主事 後藤 洋子 様）  |
| 8  | Q-Uの分析に基づく2学期の学級経営計画作成・実施                                       |
| 10 | いじめ見逃しゼロ強調月間の取組<br>・「よいこと金山」（児童会）<br>・いじめ見逃しゼロ親子短歌の作成           |
| 11 | ・Q-U（全学年）<br>・わくわく祭り（タブレットを使った出店）                               |
| 1  | Q-U調査の分析に基づく3学期の学級経営計画作成・実施                                     |

## 2 成果

### (1) 取組による効果（※児童生徒、教職員、家庭、地域等にみられる変容）

子どもたちが落ち着いて学校生活を送っている。

- ① 2学期末児童アンケートの結果で「学校は楽しいか」の問いに対して全校児童の94%（昨年度69%）が「楽しい」と回答、「自分がされていやなことを相手にしなかったか」の問いに対して83%（昨年度70%）が「はい」と回答、「自分には良いところがあるか」の問いに対して81%（昨年度53%）が「ある」と回答した。

保護者アンケートでは、「お子さんは、楽しく学校に通っていると思うか」が96%（昨年度91%）、「お子さんは、相手に対し優しく接しているか」が96%（昨年度91%）と、肯定的に評価している。

また、9月に行われた第2回学校運営協議会では、「子どもが楽しそうに遊んでいる」「遊びに落ち着きが出てきた」「ルールが浸透している感じがする」「高学年がよいお手本になっている」「子どもが前向きになっている」等、地域の方からの声があった。

- ② 11月のQ-Uの結果では、全校児童の52%（6月43%）が満足群に位置し、侵害認知群は16%（6月29%）、不満足群は16%（6月15%）であった。各学級で生活のルールやリレーションについて話し合い、めあてを決めて取り組んだ成果と考える。

## (2) 特に効果が見られた取組例（取組の具体を記載する）

| 月日                   | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 成果                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 6 月<br>10 月<br>(2 回) | <p>いじめ見逃しゼロ強調月間の取組</p> <p>①クラスなかよし宣言の作成（6 月）</p>  <p>クラスの実態を振り返り、楽しく過ごすにはどうしたらよいか学級で話し合い、クラスなかよし宣言を作成した。</p> <p>②よいこと金山（放送委員会）（6・10 月）</p>  <p>相川小学校 77 人のキラキラ光るよいところやがんばっていることを小判に書き、放送委員会が昼の放送で紹介をした。</p> <p>③いじめ見逃しゼロ親子短歌の作成（10 月）</p> <p>上の句を子どもが作成し、それを受けて下の句を大人が作成し、親子でいじめについて考えた。</p> | <p>・なかよし宣言の作成をとおして、友達とのよりよいかかわりについて学級で話し合うことができた。また、なかよし宣言を受けて、各学級が取り組んだ結果、「自分がされて嬉しいこと、喜ぶことを相手にしよう」という意識をもてるようになっている。</p> <p>・友達の良い行為や頑張っていることを見付けることができた。カードには、友達とのかかわりの中で感じた感謝の気持ちも書かれていた。</p> <p>・人に喜ばれる、認めてもらえることで、自己肯定感をもつことができた。</p> <p>・「いじめをしない、見逃さない、許さない」の思いを共有することができた。</p> <div data-bbox="1197 936 1428 1205" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">(親)                  (子)</p> <p style="text-align: center;">わすれないうれしいね<br/>うれしいね<br/>一年生親子</p> <p style="text-align: center;">ぶらんこ<br/>ゆずって<br/>うれしい<br/>うれしい<br/>うれしい</p> </div> |
| 11 月 26 日<br>(金)     | <p>〇わくわく祭り（タブレットを使った出店）</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | <p>・5・6 年生は、タブレットを使って 1～4 年生に楽しんでもらえるよう、工夫して計画・運営をすることができた。</p> <p>・1～4 年生は、わくわく祭りに楽しんで参加した。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 年間                   | <p>〇ルールとリレーシヨンの確立を目指す学級づくり</p> <p>〇情報交換<br/>(毎週水曜日 16:00～ 全職員)</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | <p>・子どもがルールやリレーシヨンの確立を目指して、めあてや活動に取り組んだ結果、ルールを守ろうとする姿、自分がされて嬉しいこと喜ぶことを相手にしようとする姿が見られた。</p> <p>・子どもの情報を共有し、子どもへの対応を統一したり子どもの良さを共通理解したりすることで、子どもたちと職員、子ども同士の関係がよかった。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |

## 3 課題

今後も自己肯定感を高める取組を行うとともに、互いに思いやりのある行動がとれる児童を増やしていけるよう、全職員で情報共有しながら家庭や地域と連携して活動等を工夫していく。

学校名 栗島浦村立栗島浦小学校

## 1 取組の実際

しおかぜ留学制度が始まって今年で9年目を迎える。今年度も県内外から20名の児童生徒が集い、寮や里親家庭で共同生活を行ってきた。学校では、島出身の児童生徒10名と共に様々な活動に取り組み、多種多様な価値観を互いに理解し合えるように活動を仕組んできた。

しかしながら、留学生にとっては親元を離れ、個々で異なる生活様式や価値観をもつ児童生徒たちと共同生活していくことにストレスを感じていることが、教育相談や生活アンケートから確認された。学校の教育活動全体で日々「いじめは絶対しない」ということを学んでおり、「いじめは絶対よくないことだ」と頭では十分理解している。ところが他者とのかかわりに欲求不満を感じ、他者を受け入れられない自分が好きになれず、学校生活も前向きに送ることができなくなるという悪循環を起こす児童生徒がいる。

そこで今年度は、いじめ未然防止の観点から「自己肯定感を高めること」に焦点を当て、本事業を行うことにした。

### (1) 第1回教育講演会（対象：児童生徒・教職員）

6月28日（月）新発田市教育委員会教育長 工藤ひとし氏を講師にお招きし、演題「君たちは未来の宝物～過去は変えられないが未来は変えられる～」のもと、教育講演会を行った。この講演では自分らしさを大切にすること、また、人の興味関心は人それぞれ違うものであり、それを尊重しながら生活していくことが大切であることを学ぶことができた。事後の児童生徒の振り返りを紹介する。

「自分を大切に」という言葉が心に残りました。私は、「自分は意地悪だ」とか自分の悪いところをいつも思っていました。でもお話を聞き、これから自分を大切にして見捨てないようにしていきたいです。



写真：当日の講演会の様子



プレゼンを使っの講演の様子



生徒とのやりとりの様子

### (2) 第2回教育講演会（対象：児童生徒・教職員・保護者・地域住民）

12月17日（金）に再度、新発田市教育委員会教育長 工藤ひとし氏を講師にオンラインによる教育講演会を実施した。演題は、「与えて嬉しい言葉、もらって嬉しい言葉」である。今回は、講演を聞く前に児童生徒・教職員・保護者・地域住民が混じってグループを作り、車座になって演題についてグループワークを行った。このグループワークを通して児童生徒は、もらって嬉しい言葉の中で一番多かった言葉が「ありがとう」であることに気づき、これから生活の中で使っていきたいという気持ちをもつことができた。その後の講演会では、言葉に焦点を絞り、言葉は人を助け、成長させ、時には傷つけるなど、不思議な力があること、だからこそ、言葉はとても大事なものであるから大切に使うべきことを知るよい機会になった。



写真： グループワークの様子



オンラインによる講演会の様子



まとめの様子

## 2 成果

### (1) 児童生徒の自己肯定感の高揚

2回の講演会を通して工藤氏から自分が自分らしくいることの大切さ、ありのままの自分を受け入れることの大切さを学ぶことができた。今まで自分を大切に思っていなかった児童生徒も2回の講演会を聞くことで自分を大切にしていきたいという気持ちが醸成されてきた。

### (2) 教職員の児童生徒観に対する意識の変容

第1回「いじめの未然防止パイロット事業研修会」で工藤氏から教職員対象に演題「子どもは未来の宝物」、サブタイトル「自己肯定感を育む」をテーマに御講演いただいた。その内容は「子供たちは宝物であり、ありのままの子供たちを受け入れることが大切である。」というものであった。また、「日々子供たちと誠実に向き合っている先生方に敬意を表したい。」というねぎらいの言葉をいただいた。この御指導を受けて教職員は、今までの児童生徒への接し方を改めて見つめ直し、「まず、児童生徒を受容することが大切である。」という意識が生まれた。それがその後実施された教育相談での「それは大変だったね」「分かる、分かる、その気持ち」などの教職員の温かい言葉につながっている。

### (3) 保護者・地域住民の意識の変容

子供たちの自己肯定感を高めるためには、学校だけでなく、保護者をはじめ、子供たちを取り巻く大人のかかわりが大切であると考え、2回目の工藤氏講演会では、保護者や児童生徒を取り巻く地域の人たちも巻き込んで講演会を行った。講演会後の保護者、地域住民の感想は次のとおりである。

○チクチク言葉を発言しないように心掛けて、ふわふわ言葉を言える人間になりたいと思います。

○ふわふわ言葉、チクチク言葉のグループワークから自分を大切にしながら相手を思いやる大切さを学びました。

## 3 課題

- ・ しおかぜ留学制度により毎年クラスの構成メンバーが変わるため、子供たちは、一年ごとに新たな人間関係を構築していかなければならない。そのため、毎年4月当初から意図的に人間関係づくりをねらった活動を随時仕組んでいくことが重要となる。
- ・ 教職員一人一人がもっと児童生徒理解の本質を学び、外部講師に頼ることなく、児童生徒の自己肯定感を高められる働きかけ（接し方及び言葉がけ等）を習得していく必要がある。
- ・ 児童生徒の自己肯定感を高めていくことは、学校の取組だけでなく、家庭や地域の協力体制も必要不可欠であるため、このような会を毎年継続していかなければならないと考える。